

「教育臨床総合研究 14 2015 研究」

## 平成 26 年度の基礎体験領域の取り組みについて

A Report of Approaches on the “Basic Experience Area” in 2014

寺 井 由 美 *	山 田 二 郎 *
Yumi TERAJ	Jiro YAMADA
光 森 智 哉 *	柳 野 幸 敬 *
Tomoya MITSUMORI	Yukinori YANAGINO
長 岡 美 沙 *	村 上 幸 人 *
Misa NAGAOKA	Yukito MURAKAMI
川 路 澄 人 **	
Sumito KAWAJI	

### 要 旨

島根大学教育学部の教員養成カリキュラムである「1000 時間体験学修」を実施してから 11 年が経過し、1000 時間体験学修を修了した 8 期目の卒業生を送り出すことができた。

ここでは、平成 26 年度の「1000 時間体験学修」における基礎体験領域の取り組みの概要、さらには基礎体験におけるアンケートから見た成果等について報告する。

〔キーワード〕 基礎体験領域、基礎体験におけるアンケート、成果と課題

### I はじめに

「1000 時間体験学修」は、1000 時間に及ぶ体験学修を卒業要件として必修化した教育課程であり、「基礎体験」「学校教育体験」「臨床・カウンセリング体験」の 3 つの体験領域から構成されている。

基礎体験領域は、地域の様々な活動への参加や社会教育施設などでの教育活動、小・中学校等での学習支援等を通じて、教師に必要な資質の土台となる社会性や豊かな人間性を養うものである。さらに、子ども、地域、学校と主体的に関わり、多様な体験をもとにした教育実践力を育むものである。基本的な流れは、各事業所が行う様々なプログラムの中から、興味・関心のある体験活動に参加し、活動を通して自分の課題に「気づく」、その課題の解決に向けた活動の方向性を「つかむ」、活動への取り組みを「深める」という段階を経て進めていくものである。また、活動にあたっては附属教育支援センター専任教員が、事前・事中・事後指導にあ

\* 島根大学教育学部附属教育支援センター

\*\* 島根大学教育学部初等教育開発講座（附属教育支援センター兼任）

たり、学生の学びがより充実したものになるように支援を行い、学生は体験で得た学びを4年間で積み上げていく。

また、活動を通して身につけさせたい資質・能力として10の力（学校理解、子ども理解、教科の基礎知識・技能、学習支援の指導技術、リーダーシップ・協力、社会参加、コミュニケーション、探求力、社会の一員としての自覚、リテラシー）を設定しており、評価の具体的観点としている。

各活動の事後指導や各基礎体験セミナーの振り返りの際には、これらの観点をもとに活動記録票の振り返りシートに自己評価をさせ、自己認識や課題意識の深化などの自己成長を促している。

## II 基礎体験領域における取り組みの経緯

1000時間体験学修がスタートした平成16年度から平成26年度までの、11年間の基礎体験領域における取り組みの経緯と改善点を表1にまとめた。平成26年度の改善として実習セメスター学校教育体験、ビビットひろば、各学年の基礎セミナー、だんだん塾講演会の4点を挙げている。

実習セメスター学校教育体験では、平成23年度から始まった学生の希望による母校等の体験先を協定締結市町村内のみのオプションとして対応することとした。

ビビットひろばは、前後期各2回の開催を各1回に変更した。

各学年の基礎セミナーは、平成22年度から1年生対象のスタートアップセミナーを新設したことによる平成20,21年度入学生への時間変更の措置がその後も継続され、必修15時間を上回って実施していた。そこで、各セミナーの内容と時間を見直し合計15時間となるよう変更した。

だんだん塾講演会は、基礎体験領域と臨床・カウンセリング領域の連携を図り、「だんだん塾講演会 兼 C系G系特別講義」として共同で開催した。

表1 11年間の基礎体験領域における取り組みの経緯と改善点

	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
事業所との連絡協議会	—	—	○	◎	○	○	○	○	○	○	○
実習セメスター学校教育体験	—	—	○	○	○	○	○	◎	○	◎	◎
ビビットひろば	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎
事前・事後指導の実施	—	—	○	○	◎	○	○	○	○	○	○
各学年の基礎セミナー実施	—	—	○	○	◎	○	◎	◎	○	◎	◎
だんだん塾講演会	—	—	○	○	◎	○	◎	○	○	○	◎
基礎体験活動記録票	○	○	◎	○	○	○	◎	○	○	○	○
入門期セミナーI	△	○	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○
基礎体験合同説明会	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○
実習セメスター説明会	—	—	○	○	○	○	◎	○	◎	○	○
学内資格認定（3資格）	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○
卒業生及び就職先への聞き取り調査等					△	—	—	—	◎	◎	—
専任教員数	2名	4名※1	4名	4名	5名※2	4名	4名	5名	4名	4名	5名※2

(注) ※1 H17以降1名は鳥取県から、※2 H20,25年度 1名は特任教員

### Ⅲ 平成 26 年度の取り組み

《末尾に資料として「平成 26 年度基礎体験領域における年間活動実施一覧表」を掲載》

#### 1. 基礎体験活動

(1) 基礎体験活動の参加実績（実習semesterにおける活動ならびに専攻別体験活動を除く）

基礎体験活動を卒業要件とする対象学年が 4 学年全てになった平成 19 年度からの実績はおよそのべ 2000 人前後で推移している（表 2 参照）。今年度は、島根県・鳥取県内において 206 団体より 443 件の活動募集を出していただいた。その内、実際に学生が参加した活動は 253 件であり延べ 2396 人の学生が体験活動を行った。活動受入団体数、募集活動数、学生参加活動数は近年減少傾向にある一方で参加学生延べ人数は微増している。学生が参加可能となる基礎体験活動の条件（場所、時間、内容等）がある程度明確になる中で持続可能な活動が精選されつつある。また、一活動で多くの人数を募集するものが増えている傾向があることも要因として考えられる。

今年度の卒業生の平均体験時間は 596.3 時間であり、昨年度 632.1 時間と比較するとかなり減少している。その要因としては詳細の分析が必要であるが、平成 24 年度の調査では平成 21～23 年度の 3 カ年の卒業生において、基礎体験（選択）を 1000 時間以上行っている学生が約 13% を占めていたが、平成 26 年度卒業生における該当者の割合は約 5% とかなり減少している。学生自身が、活動に取り組むにあたって、学業や部活動などの大学生生活全般における時間的なバランスを留意するようになったのではないかと考えられる。

いずれにしても、卒業要件とされる基礎体験（選択）400 時間に対し、例年同様に平均して約 200 時間も多く取り組んでおり、各期必修セミナー後のアンケート調査の結果も含めて、体験学修の意義が学生にしっかり理解されていることが分かる。

表 2 基礎体験活動への参加実績

	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
受入団体数（団体）	225	226	266	295	277	266	244	206
募集活動数（件）	396	451	475	504	511	508	496	443
学生参加活動数（件）	341	338	340	375	400	348	370	253
参加学生延べ数（人）	2012	1898	1953	2397	2478	2292	2469	2396

次に、今年度の体験活動の種別を参加人数による割合で示す（図 1）と、青少年教育施設を中心とする社会教育移設での活動への参加が多い。続いて各種団体における活動、そして大学主催の活動（環境寺子屋、公開講座や競技会の支援など）が占めている。土・日曜日もしくは夕方などの放課後に行われる活動でバス等の輸送手段が確保

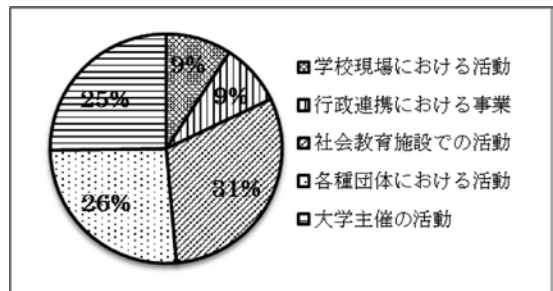


図 1 基礎体験活動の参加種別（平成 26 年度）

でき、そして大人数で募集される施設・団体の活動は、学生にとって参加しやすく、割合的に参加者は多くなるであろう。また、学生個人における活動種別の割合を調べると、幅広く多様な活動をしている学生がいる一方で同じ種類もしくは同じ事業主での活動のみに偏っている学生がかなりいることが以前より指摘されている。今年度は2年次生必修の充実期セミナーで、活動名と時間に加えて各自の活動種別の割合を示した円グラフを時間認定確認資料として配付したところ、自分自身で活動種別のバランスを視覚的に確認でき、意識化を図れたと考える。今後も、教師力を総合的に育成する観点から、活動種別の偏りを是正していく改善策を検討していく必要がある。

学校現場での活動は、教育学部として少なく思われるが、学校教育実習が行われる3年次生に、実習 Semester における学校教育体験活動として別途行われているので、そちらを参照してほしい。

### (2) だんだん塾（事前・事中・事後指導）

基礎体験活動を行う際には、必ず30分間ずつの事前・事後指導を行っている。活動が長期にわたる場合は事中指導を行う場合もある。事前指導においては、活動内容の概要を知らせるとともに参加理由を確認し、活動を通して何を学び、どんな力をつけたいかなどの目的を考えさせ、活動記録票の記入を通して明確にさせている。活動後の事後指導では、活動の振り返りを通して自分の成長や課題を確認したり、他の参加者と学びの共有化を図ったりすることにより、体験学修の有意義感を持たせるように努めている。また、学生から出された課題に対しては専任教員がアドバイスを送り、必要に応じて事業主と連携を取りながら今後の活動に向けての支援を行っている。これらの指導は4名の専任教員が地域割により分担して行っている。

### (3) だんだん塾講演会

例年、教育支援センター主催のだんだん塾講演会を4回程度開催している。その成果については、これまでの『島根大学教育臨床総合研究』の「基礎体験活動の取り組みについて」に記載されているが、一方で、

- ・授業の少ない水曜日午後が開催候補日となるが、集中講義、補講、セミナーやゼミ活動、部活動や平日の基礎体験活動（学内での実施分も含めて）等に出かける機会と重なることもある。そのため、学生の参加人数の確保が難しい場合もある。参考までに、参加人数実績はこれまで10～60人（60人は臨床・カウンセリング領域との合同開催時）である。
- ・臨床・カウンセリング（以下C系G系）領域でも、外部講師による特別補講が教育支援センター主催で各期各4回行っており、年間では12回前後開催していることになる。
- ・予算やセンター専任教員の業務の縮減が今後に向けて要請されている。

といった課題を抱えていた。

以上より、基礎体験領域部門とC系G系領域部門の連携を図り、だんだん塾講演会ならびにC系G系の特別補講を「だんだん塾講演会 兼 C系G系領域特別講義」として共同で開催を図った。（表3）。講師については専任ならびに特任教員により検討し、学校教育現場で活躍している先生方をお迎えすることができ、充実した実践的な内容になったと考える。

今年度の方策により当初の課題はかなり改善されている。学校教育現場における貴重な体験の話をも多くの学生に聞いてもらうことができた反面、C系G系の補講という要素もあって参加

者のほとんどが学校教育実習を経験していない 2 年次生であり、教職を志向する 3・4 年次生の参加は少数であった。今後、C 系 G 系特別講義の趣旨や性格を踏まえた上でのだんだん塾としての連携のあり方について検討する必要がある。

表 3 だんだん塾兼 C 系 G 系特別講義の開催実績

回数	月 日	講 演 者	講 演 テ ー マ	参加人数
第 1 回	7 月 16 日 (水) 14:30-16:00	安来市立第三中学校 妹尾 辰巳 氏	通級による指導に おける発達臨床	38 名
	〃 16:15-17:45			30 名
第 2 回	7 月 23 日 (水) 14:30-16:00	江津市立跡市小学校 玉木 敦 氏	ピア・サポートで いじめ解決	30 名
	〃 16:15-17:45			46 名
第 3 回	12 月 17 日 (水) 14:30-16:00	松江市立古志原小学校 吉野 晃子 氏	目の前の子どもの体を よく見よう!	70 名
第 4 回	1 月 7 日 (水) 14:30-16:00	米子市立伯仙小学校 信田 明子 氏	大学 4 年間で教師の 『今』をつくる	70 名
第 5 回	1 月 21 日 (水) 16:15-17:45	松江市立古江小学校 笹原 由乃 氏	保護者とのほっと コミュニケーション	55 名
第 6 回	1 月 28 日 (水) 14:30-16:45	松江市立第四中学校 松井 浩美 氏	保健室から見た 最近の子どもたち	47 名

#### (4) 専任教員による日常相談活動

学生からの要望で、不定期ではあるが基礎体験活動や広く生活面における個別相談、教員採用試験に向けての願書添削や面接指導、小論文指導等を行っている。基礎体験活動の事前・事後指導や学校教育体験領域における学校教育実習、学校教育実践研究などで顔見知りの学生も多く、あらゆる相談の窓口となっている。また、現役で教員採用試験合格を目指す学生を支援する「未来教師塾」が 2 月に開設され、専任・特任教員もその指導者として協力している。

#### (5) 島大ビビットひろば

松江市内の小学生の土曜日における居場所づくりとして、教育支援センター主催で開催してきた基礎体験の事業で、今年で 10 年目を迎える。今年度は学生の企画段階の負担等を考慮して、前後期各 2 回の開催を各 1 回とした (表 4)。学生たちはどのような活動をしたら子どもたちに喜んでもらえるのか、そのために必要な準備は何かなど、自分たちで話し合い、企画を行った。また、当日は子どもとふれ合うのが初めてという 1 年生もおり、子ども理解や企画力育成の一步になっている。また、これを機会に他の基礎体験活動に積極的に挑戦する学生も見られる。また、各専攻からも専攻別体験として児童向けの講座を毎回企画・開催してもらい、それぞれの学びを生かした活動提供に努めてもらっている。

表 4 ビビットひろばの開催実績

回数	実施日時・実施講座名・申込者数
第 1 回	7 月 12 日 (土) 9:30-12:00 講座【教育支援センター・英語・健康スポーツ】72 名
第 2 回	11 月 15 日 (土) 9:30-12:00 講座【教育支援センター・英語・健康スポーツ】68 名

## (6) 入門期セミナー I

新入生を対象とした初年次教育のガイダンスである。今年度は下記の通り実施した。

- 1) ねらい
  - ①教育体験活動「1000 時間体験学修」の全体像を把握し、大学生活 4 年間の教育体験活動に対する見通しを持つ。
  - ②これからの大学生活を共にする学生同士が交流を深め、円滑な人間関係を築くきっかけにすると共に、島根大学教育学部生としての自覚を高める。
- 2) 期 日 平成 26 年 4 月 12 日（土）～4 月 13 日（日）
- 3) 会 場 島根県立青少年の家
- 4) 参加者 島根大学教育学部 1 年生 176 名、学生スタッフ 38 名、教職員 9 名
- 5) 内 容

研修 1…「1000 時間体験学修の意義」	研修 2…「出会いの場と仲間づくり」
研修 3…「基礎体験活動の進め方」	研修 4…「大学生の一般常識とマナー研修」
研修 5…「基礎体験活動や大学生活についてディスカッション」	
研修 6…青少年教育施設の体験プログラム 研修 7…「2 日間の振り返り」	

新入生によるセミナーに対する自己評価の結果は次の通りであった。肯定的回答 5，否定的回答 1 とした 5 段階による数値の 1 年生全体の平均値を示す。

- ①入門期セミナー I は、有意義な活動となったか。【4. 8】
- ②同級生との交流を通して新たな人間関係を結ぶことができたか。【4. 6】
- ③ 1000 時間体験の全体像を理解することができたか。【4. 3】
- ④教育学部生としての意欲や自覚を持つことができたか。【4. 4】
- ⑤入門期セミナーに向けて立てた個人目標は達成できたか。【4. 1】

各観点とも平均値は全て 4 ポイント以上で肯定的な数値であった。特に本セミナーの有意義感に関わる数値が高くなっている。記述による評価について分析すると、これらの数値を裏付ける達成感のある回答のみであり、否定的な受け止めをしていると認められる記述は皆無であった。

また、本セミナーの特徴は、ピア・サポート制度を活用し、先輩である上級生によって研修内容の大半が企画・運営されている点にある。今年度は、38 名の上級生が学生スタッフとして参加した。研修 2～5 を学生企画として担当し、新入生の目線に立ったセミナーを実施した。



研修 5 ディスカッション

新入生の感想を見ると、入学当初の不安が解消され、これから始まる大学生活への意欲や希望が高まったという感想と共に、生き生きと活動する学生スタッフの姿に刺激を受け、自分もこんな先輩になりたいと憧れの気持ちを持ったという感想が多くあった。また、学生スタッフの振り返りには、リーダーシップや協調性、企画力や運営力などの総合的な自己能力の成長を感じるとともに、今後の課題について言及している内容が多くあった。

学生参画による入門期セミナー I は、新入生、上級生、両者にとって学びの多い貴重な体験の場となっており、今後も充実した活動にしていきたいと考える。

(7) 実習 Semester 学校教育体験活動

3 年生後期の教育実習（実習Ⅳ・Ⅴ）期間の 9 月から 12 月を実習 Semester とし、その期間に附属学校園での教育実習の学びと、公立学校での体験を互いに往還させながら教育実践力を高めることをねらいとして、平成 18 年より学校教育体験活動の推進に取り組んでいる。



卒業生による体験発表

6 月下旬に開催した説明会では、公立学校での校長経験のある教育支援センターの教員、昨年度の体験者である 4 年生、平成 24 年度本学部卒業の現職教員の 3 名に、実習 Semester 学校教育体験活動で得られる学びについて、それぞれの立場から話してもらい参加意欲の向上を図った。

実習 Semester 学校教育体験活動は、協定締結市町村内の学校園に教育委員会を通じて学生の受入れ募集を行っていただいている。また平成 23 年度から県外を含め母校での教育体験活動を認めた結果、母校体験を希望する学生が年々増加し、活動先も全国へと広がっていった。その結果、受け入れ先への十分な趣旨説明や学生の活動状況の把握が困難となったり、図 3 に見られるように協定締結市町村からの募集活動に対する学生の参加率が低下してきたりするなどの課題も発生してきた。そこで平成 26 年度は、本体験活動のねらいは協定締結市町村からの募集活動の中で達成できると考え、学生の希望による体験先は協定締結市町村内のみのオプションとして対応することとした。

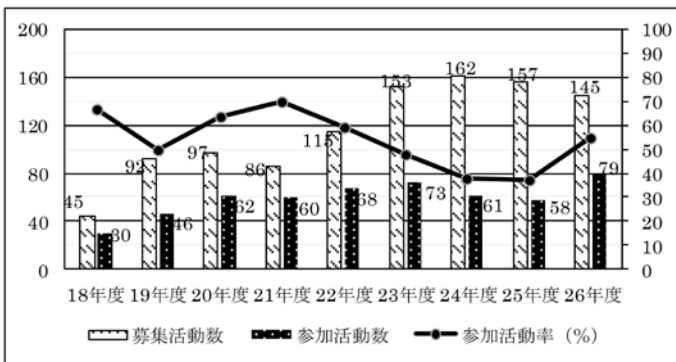


図2 実習 Semester 学校教育体験活動の募集活動数等の推移

今年度は 85 の学校園より 145 種類の活動について募集があり 79 種類の活動について学生が参加した。近年募集をいただく学校園数及び活動数が減少傾向にある中、松江市校長会で受け入れの要請をしたところ、中学校からの募集は昨年度より 7 校増加し 26 校であった。また募集活動に対する参加活動率は、54.5% となり昨年度の 36.9% から 17.6% アップした。また、9 年間の参加人数等の推移を図 3 に表した。今年度は参加学生数 120 名、参加率 71.0%、参加のべ人数 181 名と昨年度と同様約 7 割の学生が参加した。母校体験活動の廃止の影響は数値的には現れていない。

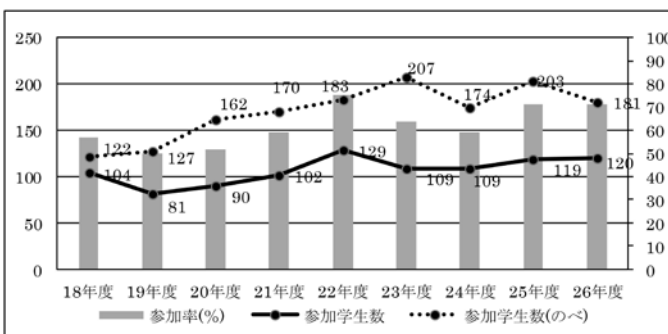


図3 実習 Semester 学校教育体験活動の参加人数等の推移

次に教師力 10 の指標のうち、学校教育体験に直接関わる指標に

表5 実習 Semester 参加学生の学びについて

設 問	2年生・2月	3年生・12月	
		実習 Semester 参加者	実習 Semester 不参加者
1. 学校理解			
①学校や校種の特色等を理解することができた。	3,3	3,7	3,6
②教師の仕事などを理解することができた。	3,3	3,8	3,5
2. 子ども理解			
①子どもの発達段階の違いに応じた関わり方をすることができた。	3,8	3,9	3,7
②用事・児童・生徒へ支援・指導・相談への対応が適切にできた。	3,5	3,5	3,3
3. 教科基礎知識・技能			
①学習支援する教科等に関する基礎的基本的な知識や技能が身についた。	2,9	3,4	3,3
4. 学習支援の指導技術			
①学習支援のための指導技術が身についた。	3,0	3,6	3,3

ついて、実習 Semester 学校教育体験活動に参加した学生と、参加しなかった学生について比較したデータが表5である。

子ども理解以外の3つの指標においては実習 Semester 参加者、不参加者ともに、2年生2月の時点より

数値が伸びている。これは、教育実習での学びが大きいと考えられる。その中でも特に実習 Semester 参加者は、教師の仕事の理解と学習支援の指導技術について不参加者より0,3ポイント上回っている。また、子ども理解の指標では、実習 Semester 参加者はほぼ横ばい、不参加者は数値が下がっている。これは、子どもを理解する事は容易ではなく、よほどの努力や経験が必要であることを学生たちが現場体験から学んだ姿ではないかととらえている。

受入れ校（アンケート協力51校園）からの評価について、図4,5に示す。

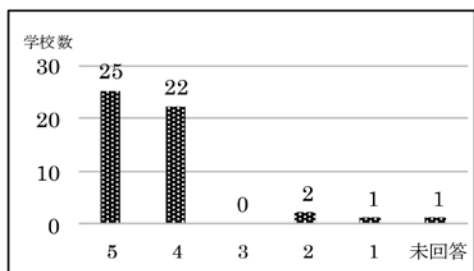


図4 問い：学生の活動は期待通りであったか。

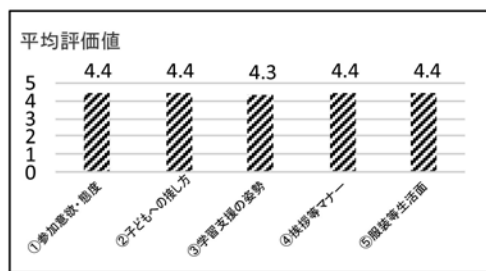


図5 問い：学生の様子はどうであったか。

5（とてもよい）、4（よい）、3（まあまあ）、2（あまりよくない）、1（よくない）

学生たちの活動は、ほとんどの受け入れ校の期待やニーズに応えることができた（図4）。また観点別評価では、いずれの項目も高い数値である（図5）。学生自身が自主的に登録していることや教育実習を通しての指導など、大学での取り組みが成果を上げていると考えられる。

## 2. 学内資格認定制度

教育支援センターでは、「体験学修ピア・サポーター」「学校教育サポーター」「コミュニティサービス・サポーター」の3つの学内資格を設定している。今年度の認定者は非常に少なく延べ2名であった（表6）。

今年度の資格認定者は、1,2年対象の基礎体験交流会において自己の体験活動で得た学びを伝えたり、下級生の体験発表へのコメントやアドバイスを行ったりした。下級生にとって先輩の生の声

表6 学内資格認定者数

学内資格名	認定者数	学年別人数
体験学修ピア・サポーター	1名	3年生1名
学校教育サポーター	0名	
コミュニティサービス・サポーター	1名	3年生1名



は説得力があり、自分自身の数年後の姿と重ね合わせながら熱心に聞いていた。しかしその他の基礎体験セミナーでは、有資格者だけでは支援者が足りず、「正課ピアサポートプログラム」を利用して、支援者を集めることとなった。今後は、学内資格についての認知や資格を得ることによるメリット等をさらに広めていく必要がある。

### 3. 各事業所との連携

基礎体験活動を推進していく上で、年間 400 件を超える多数の活動を提供して下さる事業所との連携を密にしていくことは、体験の量的充実だけではなく質の向上においても大切である。今年度も、基礎体験活動合同説明会を 1 回と基礎体験活動連絡会議を 2 回実施し、本活動の趣旨や期待する学び、募集手続き等についての共通理解を行った。また、意見交換を通して学生によりよい学びの場や環境を作るとともに、受入事業所にとっても大学と連携することによるメリットのある活動のあり方や、学生募集の方法について話し合った。

#### (1) 基礎体験活動合同説明会及び第 1 回基礎体験活動連絡会議

《平成 26 年 4 月 16 日（水）》

合同説明会 (14:30 ~ 15:30)	場 所： 第 2 体育館 参加者： 1 年生 176 名, 事業所 27 団体
連絡会議 (15:45 ~ 17:00)	場 所： 教養講義室棟 2 号館 4 階 702 号室 参加者： 38 事業所より 55 名 支援センター 8 名

入門期セミナー I を終え、基礎体験活動への意欲が高まっている 1 年生を対象に、実際の受入事業所を招いての基礎体験活動合同説明会を実施した。今年度は 27 事業所が参加して下さり、予定されている活動内容等について、1 時間のポスターセッション方式で説明していただいた。学生たちも各ブースをまわって、実際に体験をさせていただいたり、活動内容の話の聞いたりして、今後どのような活動に取り組んでいこうか真剣に考えているようであった。



基礎体験活動合同説明会

また、説明会終了後の連絡会議では、1000 時間体験学修のねらいである、豊かな人間性と実践的な指導力育成に向けての取組方針や、基礎体験活動の流れ、事務手続、緊急時の連絡方法等について説明し、学生にとって有意義な体験活動にするために双方の共通理解を図った。

#### (2) 第 2 回基礎体験活動連絡会議

《平成 27 年 2 月 20 日（金）》

連絡会議 (14:30 ~ 16:30)	場 所： 模擬授業演習室他
	参加者： 29 事業所より 34 名, 支援センター 7 名



連絡会議（分科会）

今年度の活動報告と学生の取組状況についての説明を行った。また、4 年生が「4 年間での基礎体験活動から学んだこと」について意見発表を行った。

その後の分科会は、主催団体別に 3 グループに分けて実施した。各事業所からは、学生は意欲的に取り組んでいると評価していた

だいた。

また、学生の効果的な活用や学生の確保など、今後の取組に対する提案も多く出され、受け入れ先事業所同士の情報交換も図られた。

#### IV 基礎体験におけるアンケートからの成果

基礎体験における平成 26 年度の学生の学びはどのようなものであったか、その学修成果や取り組みの実態について、各学年のセミナーで行った学生の自己評価アンケート，ならびに受け入れ先事業所からのアンケートよりまとめた。

##### 1. 基礎体験活動の評価について

基礎体験活動は、学部教育における教員としての学生の資質・能力の向上をめざし、地域の学校や社会教育施設との連携と協力により、学生により豊かな社会性や人間関係力を身につけさせ、教育的実践力を培うことをめざして実施しているものである。

基礎体験活動としてねらう力は、活動毎の振り返りに使用している基礎体験活動記録票や、プロフィールシートにも示されている、教師力 10 軸を基に作成したものである。そして、学年毎に実施している基礎体験セミナーでこの評価項目を基にして自己評価も行っている。

ここでは、1・2 年生は基礎体験交流会，3 年生は応用期セミナー，4 年生は発展期セミナーで行った平成 26 年度の自己評価アンケートとともに、受け入れ先の事業所からのアンケートを基に、今年度の基礎体験の学びを振り返ってみたい。

##### 2. 各セミナーで行った自己評価アンケート結果

基礎体験活動の自己評価項目を、プロフィールシートの教師力 10 軸に合わせた 10 項目（軸）と、その具体的目標である 20 項目の評価項目に設定している。

表7 基礎体験領域の自己評価項目一覧

1) 学校理解
①それぞれの学校や校種の特徴などを理解することができたか。
②教師の仕事（授業実践・学級経営・校務分掌）を理解することができたか。
2) 子ども理解（学習者理解）
①子どもの発達段階の違いに応じた関わり方をすることができたか。
②幼児・児童・生徒への支援・指導・相談への対応などが適切にできたか。
3) 教科基礎知識・技能
①学習支援する教科等に関する基礎的・基本的な知識や技能をもつことができたか。
4) 学習支援のための指導技術（授業実践研究）
①学習支援のための基礎技術をもつことができたか。
5) リーダーシップ・協力
①状況に応じて意見をまとめたり，リーダーシップを発揮したりすることができたか。
②活動の趣旨を理解し，組織や集団の一員として積極的に役割を担ったり，与えられた役割を果たしたりすることができたか。
③グループの仲間，教員，地域の方々と協力して活動することができたか。

- 6) 社会参加  
①自ら進んで地域社会と関わりをもち、主として学外での活動に積極的に取り組めたか。
- 7) コミュニケーション  
①学校や地域の方々と積極的に関わりをもとうとすることができたか。  
②場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができたか。  
③実際の活動場面で子どもの話を聞き、それにきちんと答えることができたか。  
④体験受け入れ先の方と論理的にコミュニケーションをとることができたか。
- 8) 探求力  
①自分の長所や短所、これから伸ばしていきたい能力、克服すべき課題をきちんと把握できたか。  
②仲間と協力して企画を立ち上げ、実施するところまで責任をもって行うことができたか。  
③自らの課題や友達と協同する課題などを解決することができたか。
- 9) 社会の一員としての自覚（教師像・倫理）  
①社会の一員としての自覚と責任を持って行動することができたか。
- 10) リテラシー  
①コンピューター等を活用して、体験に関わる必要な情報を収集したり、体験活動に関する手続きをしたりすることができたか。  
②参加した体験をふり返り、活動記録票をまとめたり、自己評価を整理したりできたか。

この 10 軸 20 項目の自己評価項目で、今年度の各セミナーの評価結果を表にまとめたものが、表 8 である。各評価項目とも、その結果を 5 段階評価の平均値で示している。

(表 8 中の I と II は、基礎体験への取り組みと有意義感の自己評価結果である)

表 8 学生の基礎体験の自己評価結果

学年名・評価の実施時期 ・調査人数		5 段階自己評価の数値の平均値			
		1 年生 2015 年 2 月 171 人	2 年生 2015 年 2 月 164 人	3 年生 2014 年 12 月 167 人	4 年生 2014 年 9 月 163 人
	I 取り組み	3.4	3.1	3.2	3.4
	II 有意義感	4.1	3.6	3.9	3.9
1	学校理解①	3.1	3.0	3.7	3.6
2	学校理解②	3.2	3.0	3.7	3.7
3	子ども理解①	3.7	3.7	3.8	3.9
4	子ども理解②	3.3	3.4	3.5	3.7
5	教科基礎知識・技能	2.9	2.9	3.3	3.2
6	学習支援の指導技術	2.8	2.7	3.5	3.3
7	リーダーシップ①	3.2	3.4	3.6	3.5
8	リーダーシップ②	3.9	3.8	4.0	4.2
9	リーダーシップ③	4.1	4.0	4.2	4.3
10	社会参加①	3.7	3.5	3.7	3.8
11	コミュニケーション①	3.8	3.7	3.9	4.0

12	コミュニケーション②	4.2	4.0	4.3	4.4
13	コミュニケーション③	3.7	3.7	3.8	3.9
14	コミュニケーション④	3.9	3.8	3.9	4.1
15	探求力①	4.1	3.8	4.1	4.0
16	探求力②	3.4	3.3	3.4	3.6
17	探求力③	3.6	3.5	3.5	3.6
18	社会の一員としての自覚	3.9	3.7	3.9	4.0
19	リテラシー①	3.9	3.7	3.9	4.0
20	リテラシー①	4.1	3.8	3.9	4.0

さらに、1～20項目の自己評価の平均値を学年別にレーダーチャートのグラフにしたものが、図6である。

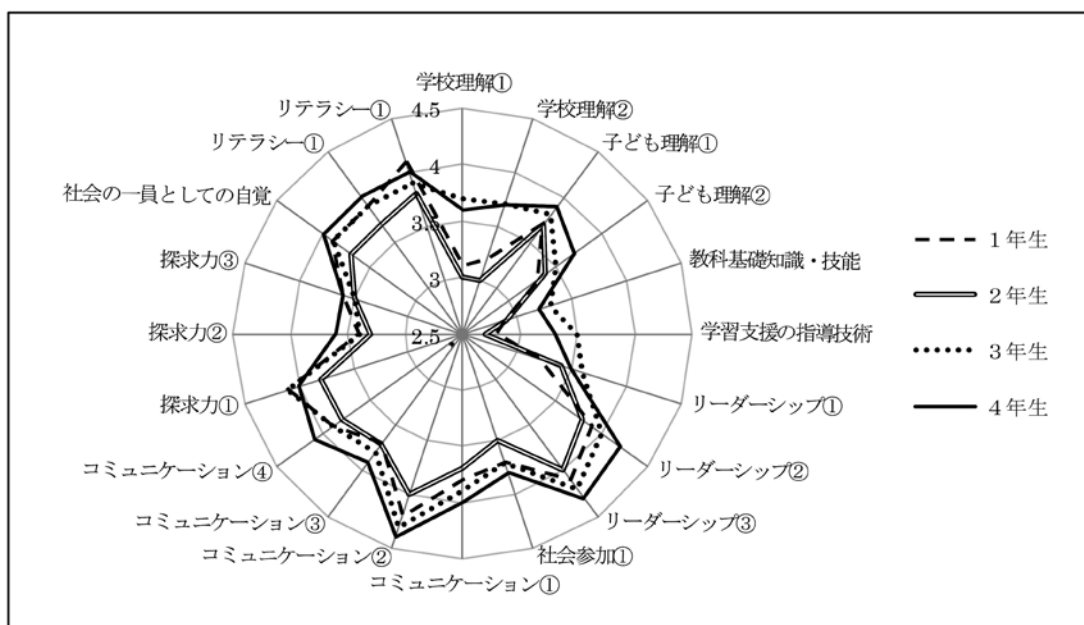


図6 基礎体験の自己評価結果グラフ

本データは同一学年の4年間の変化を示したものではないが、図6のグラフからわかるように、全体的に2年生の自己評価が低く、学年が進むにつれて全体的に各項目の平均値が少しずつ上がっていくのがわかる。平均値の高いものとして、4年生の平均値を見てみると4.4のコミュニケーション②（場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができたか）、4.3のリーダーシップ③（グループの仲間、教員、地域の方々々と協力して活動することができたか）、4.2のリーダーシップ②（活動の趣旨を理解し、組織や集団の一員として積極的に役割を担ったり、与えられた役割を果たしたりすることができたか）等があげられる。

逆に平均値の比較的低いものとしては、平均値3.2の「教科基礎知識・技能」、3.3の「学

習支援のための指導技術」があげられる。これは、教科の基礎知識・技能や学習支援の指導は、教科の専門的な力量や指導経験が大きく影響するので、他の項目より自己評価が低くなったものと思われる。

また、学校理解①（教師の仕事を理解することができたか）のポイントが、1・2年生より3年生のほうが高いのは、3年生での教育実習や3年後期での実習セメスターでの学外学校体験を経験した影響が大きいと考えられる。

次に、表8の基礎体験学修の「取り組み」の様子と、「有意義感」の評価結果について述べる。

基礎体験活動の取り組み状況は、学年毎に3.1～3.4とほぼ同水準となった。例年2年生は、この値が1年生の時よりも減少するが、今年度もその傾向が見られた。基礎体験活動の主力である2年生は、取り組もうとする意識や目指そうとする姿が高く設定されているため、かえって自己評価が厳しくなることも考えられるが、今後はさらに原因等を分析し対応をする必要がある。5段階評価で4又は5とした学生が、1, 3, 4年生は50～60%, 2年生も50%はおり全体として熱心に取り組んでいるといえる。

また、各学年の有意義感の回答結果は、3.6～4.1であり、多数の学生が基礎体験学修に有意義感をもっていることがわかる。2年生の平均値は最も低いが、有意義感を感じている割合は、79%と高い。活動を行いたい、その時間の確保等が課題としてあげられる。

有意義感を感じる理由として整理すると次の3点があげられる。

1) 子どもとのかかわり

- ・成長する姿、発達段階を実感することができる。
- ・関わり方やコミュニケーションの取り方を実践できる。

2) 支援・指導の実際

- ・授業や学習支援の現実を把握でき、自分自身のスキルアップにつながる。
- ・日常の活動の在り方や教職等の仕事理解や体験ができる

3) 企画・運営力の伸長

- ・企画・運営を体験することで、責任感・手順を学んだり達成感を味わえたりする。
- ・様々な人との交流、協力ができ、組織の在り方について考えることができる。

全体として、社会人としての責務や貢献による達成感を感じることができていることが大きい。

逆に有意義感を感じない理由として、少数意見ではあるが、やらされている感を感じたり、教職を目指さない学生にとっては、役に立たないと感じたりしている。

### 3. 受け入れ先事業所アンケート

教育支援センターでは、毎年受け入れ先事業所にアンケートを送り、基礎体験活動の学生の取り組みの様子を年度末に評価していただいている。その調査項目の1つである、「学生は体験活動へ積極的に取り組んでいましたか」の回答結果をグラフにしたものが図7である。

「積極的に取り組んでいた」と「おおむね積極的に取り組んでいた」を合わせると、例年90%を超えていることから、学生が体験活動に積極的に取り組んでいる様子がわかる。ただしこの数値に満足することなく、さらに「積極的に取り組んでいた」の割合が上がるよう、事前・事後指導や基礎体験セミナー等を通して、学生に指導していく必要がある。

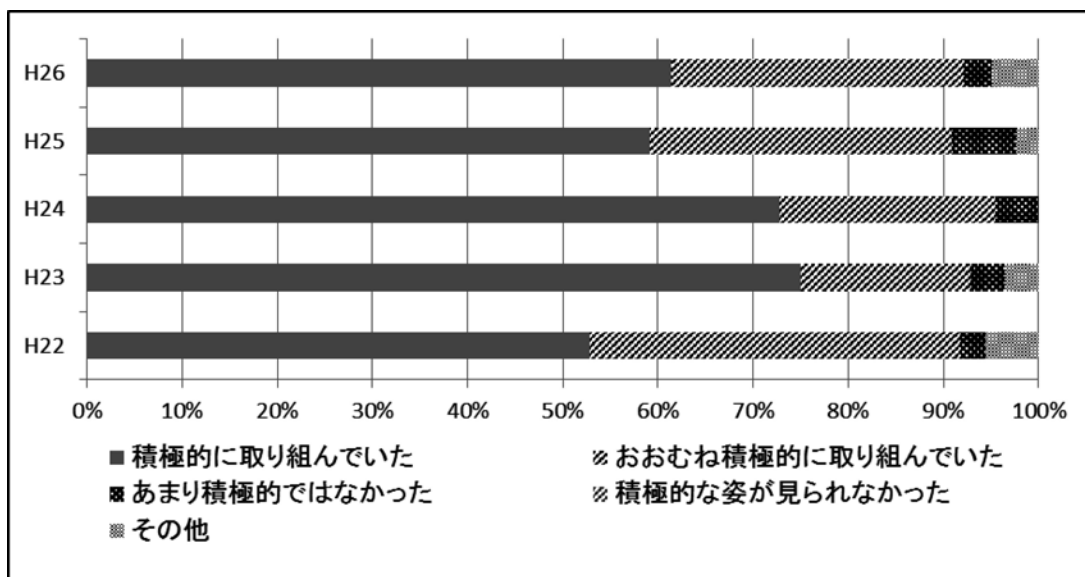


図7 受け入れ先事業所からの学生の取り組み状況のアンケート結果

次に、各事業所から送っていただいたコメントを紹介する。学生の意欲的な取り組みに対する好意的な内容が多かったが、その一方で「指示がなければ動かないではなく、もっと積極的に動いたほうがよい」や「メールを送信するときのマナーの徹底（自分の名前を必ず明記することなど）」という意見もあった。

#### 【事業所からのコメント】

- 大変意欲的に参加する学生が多く助かりました。こちらからお願いしたことだけをするのではなく、自分で気がついたことを進んで実行する姿に感心しました。
- 多くの学生さんが積極的に企画から実施まで意欲を持って参加しておられました。
- 観点（参加態度）で気になる部分はほとんどありませんでした。学習課題に取り組む子どもたちに対し、自ら声をかけ解き方や考え方を教える姿が印象的でした。
- 皆、言われたことは100%できますが、中にはもう少し主体的に考え、子どもや業務に関わる姿が見られると更に力が伸びる学生もいると感じました。
- 参加可能日の確認をする際メールの回答が返ってこない学生がいましたので、連絡の徹底をお願いしたい。

#### V 成果と今後の課題

今年度も卒業要件を満たす単位を取得した学生は、全員が1000時間の体験学修を達成し、「1000時間体験学修履修証明書」を授与した。学生の中には、3年次に教育実習や実習セメスター学校教育体験活動を通して自分の課題を見つけ、それを克服するために、4年次に卒業論文等のゼミや教員採用試験に向けての勉強とのバランスを取りながら、学校現場で基礎体験活動を積み重ねた学生もいた。そして本稿で報告した通り、地域・学校の協力のもとで、多くの学生

が基礎体験活動に参加し、たくさんの学びを得ることができた。

また 11 年目となった今年度は、この学修での学びの質を高めることを目指し、現状の再分析と把握、問題点の抽出、改善に向けての取り組みを始めたところである。以下、主な課題を挙げる。

・基礎体験活動の評価に関わって

昨年度 10 年の節目を迎え、1000 時間体験学修の成果検証を行ったが、さらに基礎体験活動領域の有意性について様々な視点からの分析が必要である。今年度は、基礎体験時間数と学業成績の相関、基礎体験活動の内容と就職状況の関連について「教員採用試験合否」というスケールを使い分析を行った。(川路ほか) その内容については、「島根大学教育学部における 1000 時間体験学修基礎体験領域の課題分析(1)」『日本教育大学協会研究年報 - 第 33 集 -』収録(平成 26 年度研究集会推薦論文)を参照されたい。今後、教員として勤務している卒業生と勤務先の管理職への追跡調査による教師力の検証、受入れ事業所へのアンケート調査などによる地域貢献についての検証も検討していきたい。

・募集活動に関わって

本学の 1000 時間体験学修のカリキュラムが地域の方々に認知されるようになり、協力していただける事業所が増加し、多様な体験の場が供給されるようになった。反面、募集数の拡大により、参加活動率の低下、受入れ先への体験学修の趣旨説明や調整不足などの課題が生じている。また実習 Semester 学校教育体験の募集校に対する参加率の低下、専攻別体験活動の閉塞化なども課題として挙げられる。基礎体験活動の本来の目的と大学の地域貢献という原点にかえり、募集する体験活動の内容や方法について検討していかなくてはならないと考えている。

・学生の取り組みに関わって

学生の中に基礎体験活動における体験時間数の二極化の傾向があり、1000 時間体験学修に対する課題意識の低下が見られる。また選択する活動の偏在化や 2 年生で 400 時間達成し終了意識をもつなどの教育効果が高まらない可能性のある実態が散見される。その改善策として、1 ~ 4 年生までの時間数や内容のモデルを設計する、基礎的な体験活動と学生本人の個性や、特色づけとして体験活動のバランスを検討するなど考えている。そして基礎体験セミナーや事前事後指導でそれを提示し、履修指導に活かしていきたい。

その他、教育支援センター専任教員の人事異動システムによる現状認識の問題、基礎体験活動に対する学部内の意識の低下など課題は山積である。学部改組という大きな改革が想定される中、今後の 1000 時間体験学修プログラムがめざす方向をはっきりと定め、そこに向かって今、何をすべきかを明確にして取り組んでいかなくてはならない。

